

# 編集の序

胆膵インターベンションの魅力は何であろうか？ ダイナミックな手技と患者の状態のドラスティックな改善が、醍醐味であると私は考えている。自分の手技が患者を救う、ということに医師として生きている実感が湧くのではないだろうか。手技が日進月歩であること、手技の種類が多く、常に新しいことに直面していることもモチベーションを上げる要素であろう。学会のビデオセッションに行けば百花繚乱の手技が見られ、観客も多く、関心の高さが伺える。

この時代にわれわれのできることは何であろうか。そのために世界における日本の位置づけを考えてみたい。最近の新しい手技、デバイスはみんな海外から入ってきている。ESDの達人たちは世界中のライブセッション、ワークショップ等から招待されているが、日本胆膵内視鏡医がそれほど海外から招待されているわけではない。海外の内視鏡医の講演を聴いても日本の文献が引用されることが非常に少ない。海外に行くたびに危機感を感じる今日この頃である。

この事態を打破するには如何したらよいのか？ デバイスラグには対抗しようがないので、やはりアイデア勝負か、先行した手技に関してもエビデンスを固めて行くことであろう。そのために新しい手技、工夫でアルゴリズムを変えていく気概をわれわれが持つことであろう。また、自己満足に終わらずに、世界中に情報を発信していくことが重要であろう。

このような状況を踏まえて、この本ではまずは胆膵内視鏡治療の普及を目指して、手技の極意をエキスパート達に伝授していただくことにした。臨床でこれらの手技が根を張って広がっていくことが重要である。さらに、最新情報を盛り込んで、世界の流れがわかるようにした。治療のコンセプトを知り、コツを知り、新しい潮流を知ることで本邦の胆膵内視鏡治療のレベルアップがなされることを強く期待している。しかし、未熟な内視鏡医が先陣争いをする事で患者を不幸な目に合わせることは絶対に避けなければならないことである。そのためにはトラブルシューティングも重要事項と考えている。

書かれている内容から重要な知識を得て、ビデオ視聴で百聞は一見に如かず、という勉強方法は上達の早道である。そのために、私の考えているエキスパート達に執筆と動画作成を御願した。珠玉の原稿、DVDであると自負している。私は、この本が日本の胆膵内視鏡治療の発展、苦しむ患者さん達に寄与することを信じている。本邦が、胆膵内視鏡治療の先進国として、アジア、欧米を抑えて世界のNumber 1に君臨することが私の夢であり、使命でもある。ともに歩む同志へのメッセージを込めて、この本を世に送り出したい。

2012年3月

東京大学大学院医学系研究科消化器内科学  
伊佐山浩通